



発行日 2009.1.29

編集発行人 重富克彦

時は縮まっている。

1Cor7:21

# Kairos

事務所所在地 064-0912 札幌市中央区南12条西12丁目2-27 011-561-9516

## キリスト者の喜び

突然召された姉妹の死を通して、あらためて「死」が私たちの心を揺さぶる強敵であることを知りました。知識として、常識として、「死は誰にでも公平に訪れるもの」であり、「決して避けられない定め」でもあり、「いつかは必ず、訪れるもの」と、理解しているつもりでも、親しい者に「死」が訪れた時、どうしても私たちは悲しみに打ちひしがれ、心に大きな痛みを受けます。

予期せぬ突然の別れであればこそ、押し寄せてくるのは埋めようのない寂しさや、喪失感、そして後悔…様々な感情が溢れ、癒しがたい何かがこみ上げ、言いようのない空しさが心を支配します。しかし、神の御言葉

は、人には癒せないもの、誰も希望を見出すことのできないところに、一筋の光として射し込んできます。

(あなたたちは生まれた時から負われ、胎を出した時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで、白髪になるまで、背負って行こう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す)(イザ

ヤ46:3b-4)

創造主なる神さまは御自分の息吹を吹き込まれた愛すべき存在の、一つ一つに常に寄り添い、担い尽くして下さると約束してくださっています。人間的に考えれば彼女の死は孤独そのもの。しかし、その瞬間、彼女は一人ではありませんでした。(わたしはあなた



たちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す)と約束された方が共に居られ、ご自身の御許に引き上げてくださったのですから…。

キリスト者の喜びの一つ、それは決して孤独ではないということ。目に見える事はなくても、私たちに命を与え、慈しみ、愛を持って育てくださる方は、どのような時も決して私たちから目をそら

すことはありません。また、私たち自身が共にいてくださるお方、同伴者を見失いそうになったときには、御言葉を持って御自分の方へと向き直らせてください。

(だが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましよう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危

険か。剣か。「わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている」と書いてあるとおりです。しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。)(ローマ8:35-39)とあるように、私たちは決してキリストの愛から引き離されることはないのです。(K. Okada)

## 教会と会議

### 2010年度総会によせて

「教会は民主主義であってはならない」と言えば、読者は首を傾げるだろうか。奇異なことを言っているわけではない。教会の主は民ではなく、キリストだから「民主」ではないのだと、自明のことを言っているだけである。

宗教改革の先駆者となったマルチンルターを苦しめたのは、当時のローマカトリックの法皇を頂点とする圧倒的多数の体制が間違っていて、異議を唱えている自分だけが正しいということなどあるのだろうか、という疑念であったという。

民主主義の原理からすれば、当然彼は間違いで、圧倒的多数の体制のほうが正しいことになる。ヴォルムス帝国会議では、ルターに対して、自説の撤回が最終的に通告された。けれど彼は、苦悩しながらも、「聖書に書かれていないことを認めるわけにはいかない。私はここに立っている。それ以上のことはできない。神よ、助けたまえ」と述べ、肯んじなかったという。その結果、ローマ法皇より破門されることになった。世が世であつたら破門は同時に死を意味した

が、時代は彼を見捨てず、プロテスタント教会が誕生した。

では、教会は民主主義を否定するのだろうか。そうではないし、そうであってはならない。「民」は「主」ではないが、主なるキリストのご意志を相対的に正しく映すには、少数のカリスマによるよりも、神の民の会議による方がよいという認識は、教会誕生の初期からあった。最初の会議は、使徒言行録に記されている使徒会議だっただろう。ここではパウロとバルナバによる「異邦人に対する割礼の是非」についての発議があり、使徒会議が行なわれて、「必要なし」の結論を得た。

異端問題でも、真剣な会議が開かれた。最も有名なのはコンスタンチヌス大帝によって352年招集されたニカイア公会議だ。そこで、イエス・キリストの神性を否定したアリウス派は退けられ、神が三位一体の神であることが確認された。合理性から言えば、よほどアリウス派のほうが合理的だったが、会議を通して神は摂理を貫かれたのだ。

ただ使徒信条は、会議によってではなく自然発生的な信仰告白として形成されたい。ローマにおいて、洗礼の時に告白していたローマ信条が原型だとも言われている。

二つの重要な公同の信条が、一方は自然発生的で、一方は会議によるものというのも興味深い。会議の相対性を示しているとも言える。

限界をわきまえつつも、不完全なわたしたちが、キリストのご意志と思われれる事柄をできるだけ適切に選ぶには、教会が初期からそうであったように、民主主義的な手続きを通して、祈りつつ決定して行くのが最良だろうと、会議制をとったのが、日本福音ルーテル教会だった。日本福音ルーテル教会は2年に一度総会を開き、各教会が代議員を送り、総会議長を選び、常議員を選出する。

2010年度の札幌教会の総会が2月7日に持たれる。この小さな会議も、細胞の一つが体の全体に連なるように、普遍的教会に連なる業であることを思いたい。どんな小さな教会の会議も、キリストの体に連なる教会会議である。会議ではもちろん民主主義的手続きが取られる。キリストのご意志を問うための民主主義的手続きである。襟を正し、一部の人に任せるのでなく、出来るだけ参加しよう。

(重富)

#### めばえ幼稚園

#### 雪国万歳

冬休みが終わって登園してきた子どもたちは、誰もが、急に背丈が伸びたように感じられる。一ヶ月の冬休みは、結構長い。毎日が成長めざましい子どもたちだから、きっと錯覚ではないに違いない。

2月にはいるとすぐに身体測定が行なわれる。そのとき、それは実証さ

れるはず。

北国の子どもたちは、幸せだ。毎日雪あそびが出来る。登園するのもそり。お母さんはちょっと大変だけれども、本州では真似をしようにも出来ないことである。27日は年長さんのそり遠足、28日はお餅つきと、冬は楽しいことが一杯。

2月の17日は表現活動参観日。生きることは表現することなのだ。感じたことをありのままに表現する。素直

な表現ほど、神さまの愛を表現することにつながる。神さまの栄光を表現することにつながる。子供は天才だ。



## 突然の死別 事故

主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。

詩編23:1

毎日事故死の報道がなされる。圧倒的に交通によるものが多い。最近、ひき逃げ報道もよく見かける。報道はそれで終わるが、事故に見舞われた家庭は状態が一変する。残された者たちは、この突然の死別を、どう受け入れることが出来るだろうか。

一組の夫婦を知っている。もう若くはない夫婦だった。この夫婦には、美しい娘がいた。大学を卒業して仕事に励む傍ら、演劇サークルでも主役を演じるような、才気あふれる女性だった。こんな娘が家にいたら、それだけで家中が明るくなるだろうと、思わせる雰囲気彼女にはあった。

ところがその娘が、通勤の途中、自転車を降りて信号待ちをしているときに、あつという間にダンプに巻き込まれ、大きな車輪の下で自転車ごと破壊されて即死してしまったのだ。

両親の悲嘆がどんなものだったか、言うまでもない。現実のことに受け止められなくても無理はない。朝、彼女が出かけるまでの日常生活と、変わり果てた遺体となって返ってきたときの現実には、あまりにも落差が大きい。

とはいえ現実には動かせない。それに対処するために、葬式が始まる、様々な段取りを踏まなければいけない。その間、体は夢遊の世界にいるようで、実感が伴わない。それは外見的には、意外にしっかりしているように見える。けれども、そうではない。

どんなに受け入れ難いことも、事実として起こったことは、事実として受け入れるほかない。けれど、何の心の準備もないままに、突然の、不幸な死別に襲われれば、心は否認し続けるのが自然だ。

このようなとき、仲の良い夫婦は、

同じ不幸を経験し、同じ重荷を負う者どうしとして、いよいよ心一つにすることが出来るだろうか。そのように思える。けれどもかならずしもそうではない。

幸せに暮らしていた夫婦を襲った突然の事故を契機に亀裂が生じ、結局は離婚に至るケースも少なからずある。加害者を憎むべき共通の敵として、団結を強めることもあるかもしれない。でも憎むことも苦しい。

同じ突然の死別と向かい合っても、夫と妻、男と女では、その向かい合い方がどうしても違ってくる。夫が、会社でも要職にあり、妻が専業主婦の場合特にそうだろう。夫は、一通り



の葬儀が済めば、否応なく仕事に戻り、何事もなかったかのように、務めをこなしていかなければならない。妻は、そのような夫を、もうあの子のことを忘れたのかといふがかり、逃げているように思い、不信感さえ持つ。

この夫婦の場合も、そのような亀裂が顔をのぞかせていたのを、傍らにいながら秘かに感じるがあった。自分たちのことをあまり多く語る事はなかったのに、秘かに感じるというだけだったが、そのため互いに苦悩している様子もうかがえた。

けれど二人は幸いにして、時間はかかったものの、いつしかそれを乗り越えて行ったようだった。二人には信仰が与えられており、二人の心は、す

べてを神に委ねるように導かれて行った。加害者に対する恨みはあったはずだが、それにもめり込まずにすんだようだった。

起こったことは受け入れるほかないものの、わたしたちはこれを神の御心として受け入れることが出来るのだろうか。美しい娘が、ダンプに轢かれるのも、神のさしがねあつてのことだろうか。御心の内でのことだろうか。

いや、やはりダンプの運転手の不注意が、災いのもとだったのだ。責任は彼にある。父なる神が共犯であるはずもない。

それなら、このような場合、神は無関係なのだろうか。無関係なら、どうして神に委ねると言えようか。

では夫婦はどうして神に委ねようという思いに達することが出来たのだろうか。

神の摂理というのは、このような不合理なことをもすべて神が差配なさるということではない。そうではなく、人間が創り出す不合理で不幸

な現実の中で翻弄される人々を、神が、必ず引き受け、御心に留め、それを無駄にはなさらないと言うことなのだ。だからこそ、どんなに不合理な体験の中にも、人は、神を見いだすし、その慈悲に出会う。「悲しむ者は幸いです」という、人間的に矛盾としか言いようがない言葉も、信仰の中では真実となる。イエス・キリストが十字架にかけられ、陰府に下ってくださったことに秘められている奥義は深い。「彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちは癒やされた」。痛みを知って下さっているキリストだからこそ、わたしたちは痛みを委ねる。(重富)

### <年の始め>

日本では正月の松飾りが飾られている元旦から7日までは「松の内」とよばれ、新年の祝賀期間である。ヨーロッパではクリスマスは、12月25日の1日だけではなく、1月6日の顕現日までを含むのであり、「松の内」になぞらえて言えば「モミの木の内」であり、その間クリスマス・ツリーやクランツを取り外さない。ヨーロッパの教会では、クリスマスよりも新年を盛大に祝賀するスコットランド教会を例外とすれば、元旦はさほど重要視されていない。1月1日を年の始まりとする暦法は比較的新しく、1691年に教皇インノケンティウス12世が元旦を教会の祭礼日と定めて以来のことで、一般化するのには1700年から、フランスではさらに遅く1806年からである。それまでは一年の始まりは、

東方正教会文化圏では1月6日（「神現祭」）、西方カトリック文化圏では12月25日（クリスマス当日）とされていた。したがって、1月1日は教会暦ではクリスマスの連続性を中断する半端な祝日となった。しかし民間習俗では1月1日は年の変わり目をする日として重んじられ、旧年の災いを



追い払い、新年の福を招く呪術的行為と結びついた。中欧では大晦日の深夜に爆竹を鳴らしたり、鉄砲を空に向けて打ったり、花火を打ち上げたりして大騒ぎをするが、これは古い年のあらゆる悪を追放する呪術行為

## ヨーロッパの民衆文化とキリスト キリスト教の中の民間信仰 (6) 栗原成郎

である。そして午前零時教会の鐘が高らかに打ち鳴らされると、人々は椅子やテーブルの上から一斉に跳び下りる。この行為を怠ると、その年の幸運をのがすことになるという。元旦に起こったことは一年中続くという俗信から、朝寝坊、浪費、借財などの旧年の悪習を断ち切り、「元旦の決意」といってなにか良い習慣を身につけるよう決心する。

### <三王礼拝>

マタイ福音書によれば、イエスがベツレヘムでお生まれになったとき、東方の占星術の学者たちが「わたしたちは東方でその方の星を見た」と言って、その星に導かれて馬槽に眠

る御子を訪ね、黄金（王権の象徴）、乳香（神性の象徴）、没薬（死体に塗る樹脂で、死と復活の予表）を贈り物として献げた。この聖書の記事は中欧のカトリック文化圏で中世に物語化されて、三人は「王」となり、カスパール（エチオピア王）、バルタザール（カルデア王）、メルキオール（アラビア王）と名前がついた。ドイツ語文化圏で

は1月6日は「ドライ・ケーニゲ（三王）」とよばれる子供の祝日となり、子供たちは青・赤・黄のマントを着て、王冠を被り、顔に煤を塗るなどして、三王に仮装し、長い杖の先に星をつけて、「星の歌」を歌いながら家々を

訪ね、新しい年の多幸を祈って戸口に三王の頭文字「K+B+M」の入った記号を聖別された白墨で書く。これはその家に悪や災いが入り込まない魔除けの印

となり、家の人は返礼に菓子やりんごなどを子供たちに贈る。三王礼拝の行事はフランスにも伝承されている。フランスの家庭ではこの日「ガレット」というパンケーキを中に空豆を入れて焼く。切り分けられたガレットの中に空豆の入ったものを引き当てた人がその座の「王」となる。英国では「顕現日の贈り物献上の儀」は宮廷行事であり、11世紀以来国王あるいは国王代理（王室式部官）がセント・ジェームス宮殿の王室礼拝堂の聖壇に黄金（ソブリン金貨25枚）・乳香・没薬（王室薬剤師が調合）を献上する儀式が首席司祭の司式の下に厳かに執り行われる。



日本福音ルーテル札幌教会 牧師 重富克彦 岡田 薫  
札幌教会 URL <http://www.jelc.or.jp/sapporo>  
札幌礼拝堂 064-0912 中央区南12条西12丁目2-27 011-561-9516  
札幌北礼拝堂 001-0031 北区北31条西4丁目1-5 011-726-3243  
新札幌礼拝堂 004-0053 厚別区厚別中央3条6-1-5 011-891-5246

